

# 季刊せいいてん no.134

●浄土真宗聖典の学習誌●



特集  
聖徳太子と親鸞聖人



江戸時代の庶民的な仏教書とお説教 / 勸化本と商業出版 幸せてなんだろう / 「ペスト」  
「唯信鈔文意」 / 最下の悪人の救い 「蓮如上人御一代記聞書」 / ほんとうの念仏

本願力にあひぬれば むなしくすぐるひとぞなき  
 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし

〔高僧和讃〕五八〇頁

（本願のはたらきに出会ったものは、むなしく迷いの世界にとどまることがない。あらゆる功德をそなえた名号は宝の海のように満ちわたり、濁った煩惱の水であっても何の分け隔てもない。）

元号が平成から令和に変わり、はや三年目を迎えています。明治時代以降は一世一元となつていますが、それまでは大災害、飢饉や疫病等があると頻りに元号が変わつていたようです。親鸞聖人が九十年のご生涯で経た元号の数はじつに三十六、平均すれば約二年半に一度改元していたことになり、聖人を取り巻く環境がいかに厳しいものであったかが窺えます。その上、

ご自身のご生涯においても幼少時代における父母との別れ、比叡山時代のご苦勞、念仏彈圧、息男善鸞さまの義絶など、聖人の九十年間は決して順風満帆なものではなかったように思えます。しかし聖人は「困難ばかりで大変な人生だった」とは振り返っておられません。むしろ「本願力にあひぬればむなしくすぐるひとぞなき」と、阿彌陀さまの願いに出遇わせたいただき、

尊い人生であったと仰っています。思い通りにならない人生ではありませんが「生まれてきてよかった」と、私の「いのちの意味」がたつた一つの言葉によつて与えられていく、その言葉こそ「南無阿彌陀仏」であると親鸞聖人は教えてくださいました。

＊ ＊

を聞かせていただいたことがありません。そのため、人は自分で生きる意味を見つけていきます。仕事、趣味、家族……色々ありますが、例えば私であれば現在二歳になる娘の存在が大きいと思います。しかし、子どもも成長すれば親の手から離れていきますし、子どもが親より長生きする保証などどこにもありません。仕事に生きる意味を求め人であっても、いつかは仕事ができなくなる日がやってきます。人は何も持たずに生まれ、人生の過程で様々な生きる意味を見つけていきますが、それらは少しずつ手放していかなければなりません。そして最後は生まれてきた時と全く同じ状態で、何も持たずに命を終えていくのです。その私の有り様をお釈迦さまは「仏説無量壽經」に、

人は誰ひとりとして、自分の意思でこの世に生まれてきてはいません。気づいたら生まれ、年を重ね、そして命を終えていかねばならないのです。なぜ生まれ、なぜ生きて、死んだらどうなるのか、これらの問いに明確な答えを

与えてくれる人はいません。そのため、人は自分で生きる意味を見つけていきます。仕事、趣味、家族……色々ありますが、例えば私であれば現在二歳になる娘の存在が大きいと思います。しかし、子どもも成長すれば親の手から離れていきますし、子どもが親より長生きする保証などどこにもありません。仕事に生きる意味を求め人であっても、いつかは仕事ができなくなる日がやってきます。人は何も持たずに生まれ、人生の過程で様々な生きる意味を見つけていきますが、それらは少しずつ手放していかなければなりません。そして最後は生まれてきた時と全く同じ状態で、何も持たずに命を終えていくのです。その私の有り様をお釈迦さまは「仏説無量壽經」に、

人、世間愛欲のなかにありて、独り生れ独り死し、独り去り独り來る。行に當りて苦樂の地に至り、趣く。身みづからこれを當くるに、代るものあることなし。（五六頁）

と説かれました。独り生まれて、独り死んでいかなければならない私のいのち、たとえどんなに親しい友人でも、家族であったとしても誰も代わつてはくれません。それはまるで、誰もいない荒野をただ独り歩んでいるようなものです。しかし、その私に聞こえてくるたつた一つの言葉がありました。

南無阿彌陀仏

「お願いだからお念仏を称えてこの人生を歩んでほしい。そして命の縁が尽きたならばあなたを必ずお浄土へと生まれさせましょう」という阿彌陀さまの願いが、この私を包み込んでくださっています。私はただ生まれて、ただ死んでいく人生ではなかった。阿彌陀さまの大きな願いに生かされ、お浄土へ生まれて仏のさとりをひらかせていただくのちであったと、さわりなき救いを告げてくださる「南無阿彌陀仏」に、生と死をつらぬく「いのちの意味」を賜っていくのです。